ネパール仏教におけるヴラタ（vrata）について

スダン・シャキャ

はじめに

13世紀初頭に滅亡したサンスクリット語を使用するインド仏教は、現在のカトマンドゥ盆地に点在するバハーやバヒー（仏教寺院）においてネワール文化の影響下で継承されている。これはいわゆるネパールを代表するネパール仏教であり、その担い手はネワール語（Newari, *nw*; 非アーリヤ語）を母語とするシャーキャ（Śākya）、ヴァジュラーチャールヤ（Vajrācārya）などの姓の仏教徒である[(1)]。ネパール仏教はインドから伝播した大乗・密教の思想と儀礼を基盤とする伝統仏教であるが、今日に至るまで独自の変化を遂げている。この仏教では、経典、陀羅尼、儀礼次第などを現地語ネワール語、ネパール語に翻訳することなく、梵文原典のままの写本を使用している。一方、14世紀頃にはネパールの梵文写本に変化が現れる。すなわち、ネワール語の翻訳または注釈が加えられた梵語・ネワール語混成の写本[(2)]が作られるようになり、その傾向は特に18世紀以降ではさらに著しくなる。

ヴラタ（vrata; *tib.* brtul zhugs）は宗教的な誓いを立てること、断食のような聖なる行為など種々の意味を持つ。後述するようにネパール仏教ではその解釈がさらに展開する。無病息災などを目的とし、特定の日に、観音、文殊など特定の尊格に対して誓いを立てる。そして、マンダラを建立し、ジャータカやアヴァダーナ物語に基づいた説法をするなど一連の修法を行うことをヴラタと呼ぶ。そのため、ネパールにおいてヴラタの思想、儀礼、物語

などに関する文献が多く作成され、その数は「ヴラタ文献」と呼べる新たなジャンルを作るほどに至り、ほとんどは梵語もしくは梵語・ネワール語混成写本として種々の大学・研究機関などに保存されている。

ヴラタはネパール仏教の特質を示すものでもある。そこで本論ではネパール現存のヴラタ文献の解析および現地調査の成果を用いてネパール仏教に実践されているヴラタの在り方、構成や特徴を考察しつつ、その展開の過程を明らかにしていく。

1．ヴラタとは

ヴラタはヴェーダ時代からインドで用いられているサンスクリット語であり、宇宙の理法・天則を意味するリタ（ṛta）と結びつけられることもある。ヴラタには時代とともにその解釈の展開が認められ、種々の梵語辞典[(3)]によれば、vrata には法則、苦行、誓い、掟、責務、禁戒、命令、聖なる行為（断食や欲望の抑制）などの幅広い意味を有することがわかる。ヴェーダ文献では、ヴラタは祭主が守るべき宗教的な責務や誓戒として解釈される[(4)]。また、法典類では、悪事の懺悔を目的とした断食などの誓いを立てる行為がヴラタとして理解されている[(5)]。なお、ヒンドゥー教徒にとってヴラタは、今日最も身近な宗教実践の一つとして沐浴・断食がその基本にある。これは種々の現世利益を獲得するために特定の日にシヴァ、ヴィシュヌなどの特定の神格を崇拝したり、プラーナ文献に由来する物語などを朗読したり、神歌をうたったりする宗教行為の一つとして確立している[(6)]。

ヴラタがいつからネパール仏教に取り入れられたのか年代は定かではないものの、15世紀頃にネパールで編纂された『グナカーランダヴューハ[(7)]』（*Guṇakāraṇḍavyūaha*）と呼ばれる韻文のサンスクリット語の経典には、断食を中心とする種々のヴラタに関する言及があるのは注目に値する。冒頭にも触れたように、ネパールで実践されているヴラタは、沐浴・断食などヴェーダやヒンドゥー教で古くから行われている宗教実践のやり方を残しなが

ら独自に展開をしている。

ネパールでは様々なヴラタが流布しており、その内容から①アプサン・ツォネグ（*nw.* apsaṃ conegu）と②ダラン・ダネグ（*nw.* dhalaṃ danegu）の二種に大きく分けることができるが、以下でそれについて述べていく。

① アプサン・ツォネグ（*nw.* apsaṃ conegu）

「アプサン・ツォネグ」の「アプサン」（apsaṃ）というネワール語はパーリ語のウポーサタ uposatha（*skt.* upavāsa, upoṣadha）に由来する言葉で、断食を示す。「ツォネグ」は行うことを意味するネワール語である。すなわち、「アプサン・ツォネグ」は断食を行うことである。実践する日数に基づけば、それはさらに二通りに分類できる。いずれも浄化・断食を中心とした個々による宗教実践である。

一つ目は月初め（saṃkrānti）、白分の八日（śukla-aṣṭami）、黒分の八日（kṛṣṇa-aṣṭami）、満月（pūrṇimā）などの節目に一日のみ実践するヴラタであり、これは単に「アプサン」と呼ばれる。このヴラタは早朝の沐浴から始まり、正午までに肉・魚が含まれない食事を済ませ、それ以降は食事を摂らないことがその特徴である。また、その日は通常の仕事をしても構わないが、不殺生、不妄語などの在家の仏教徒が守るべき五戒（pañcaśīla）を守ることが重要とされる。このように断食を基本とするこのヴラタは自発的に行うものであり、特別な資格も場所も不要であるために誰でも実行することが可能である。「アプサン」の際に行う断食は、正午以降食事を摂らない上座部の比丘・比丘尼が毎日行っているそれと類似するものである。

二つ目は「マイェ・アプサン」（*nw.* maye-apsaṃ）と呼ばれるヴラタである。語源的に解釈をすれば、ネワール語の maye-apsaṃ はサンスクリット語の māsopavāsa に由来し、māsa は月、upavāsa は断食を意味する。すなわち、「マイェ・アプサン」は一ヶ月の長期に亘って実践するヴラタである。このヴラタはグンラー（*nw.* gumlā）と呼ばれるネパール暦（Nepāla-saṃvat）の月（西暦の 7 月末から 8 月末頃に当たる）のみに行われる。

このグンラー月の一ヶ月間は聖なる期間とされ、少しの善行で多くの功徳を得られると信じられている。そのため、タバコや酒、肉・魚を断つことなどの五戒を、せめてこの期間だけでもと厳格に守り、さらに普段は寺院に行かない人びともグンラー期間中には未明から参拝に出かけたりすることで福徳の積聚に努める。この期間に一ヶ月の断食の「マイェ・アプサン」ヴラタが行われるのは現在のカトマンドゥのスヴァヤンブー寺院やパタンのゴールデン・テンプルなど特定の寺院に限られる。ヴラタ期間中は、寺院の境内に寝泊まりし、外出が禁じられる。食事は水など液体のみが認められ、飲み水も本尊の洗顔や洗足に使用したいわゆる「聖なる水」に限られ、それは必ず寺院の僧侶から受け取る。早朝に起床し身を浄め、清らかな服を着用し、寺院内の諸尊の参拝をすることがヴラタ実践者の日課となる。身口意を清め、一ヶ月に亘って断食するこのヴラタは極めて過酷な宗教行為ではあるが、それによって無病息災など無量の功徳を積むことに至るという信仰が流布しているため、毎年このヴラタを実施する人は少人数ではあるが、途絶えることがないという[8]。

上述してきた二種のヴラタについては『グナカーランダヴューハ』にも説かれている[9]。そこでは、一ヶ月断食すること（ekamāsopavāsa-）や絶食（nirāhāra-）すること、大麦一粒のみを食べることなど一日一食（ekabhaktā-）のみを食べることなど五種のヴラタについて言及され、これによって無量の功徳を得られるという。この点から断食を基本とするこれらの実践はネパールにおいて、15世紀には一種のヴラタとして認知されていると考えられる。

②　ダラン・ダネグ（*nw.* dhalaṃ danegu）

ダラン・ダネグ[10]はネワール語であり、その内ダラン（dhalaṃ）は dharma と maṇḍala に由来するという二説も存在する。ダネグ（danegu）には積む、立てるという意味がある。dhalaṃ はネワール語化した dharma であると語源的解釈するならば「ダラン・ダネグ」は善行（dharma）を積むことであ

ろう。しかし、内容から判断すれば dhalaṃ は maṇḍala（マンダラ）に由るネワール語であると考えることことが適する。そのため「ダラン・ダネグ」は「マンダラを建立する宗教行事」であると解釈できる。

図1　元日に描かれるマンダラ「ダラン・ダネグ」

ところで、ネパール現存の仏教写本、碑文などにはネパール暦（Nepala Saṃvat）が広く使用され、今日でもネワール人はこの暦に基づき、お食い初め、得度式など種々の宗教行事を決めている。この暦は太陰暦に属し、西暦の10月末頃もしくは11月初め頃を元日とする。2017年10月20日はネパール暦1138年の元日に当たる[11]。毎年元日の夕方に一年間の健康、幸運などを祈願し、ネワール人仏教徒の各家庭では、地面にマンダラを描いて供養する風習が今日も継承されているが、これも「ダラン・ダネグ」と呼ばれる。しかし、これはヴラタとは異なる。この内容を簡潔に述べると家族全員が年代順に並んで座り、**図1**のように手前に人数分のマンダラを石灰石の粉で地面に線描きし、それに各自それぞれ米、花、灯明、果物などの供物を捧げて、新年を迎える。この場合の「ダラン・ダネグ」はマンダラを建立しそれを供養する祝賀行事である。しかし、その間に断食することはなく、これまで述べてきたヴラタとは異なる。

一方、ヴラタとしての「ダラン・ダネグ」は上述してきたように浄化・断食とともに、マンダラ供養、物語の解説、巡礼など一連の儀軌を伴うもので、僧侶（根本阿闍梨）の指導の下で、複数の信者・志願者たちが集団で行う宗教実践である。ネパール仏教におけるこのヴラタは種々の儀軌の複合体でもあるため、これ以降「ヴラタ儀礼[12]」（vrata-vidhi）と呼び、その在り方や構

成について論じていく。

2．ネパールに現存する種々のヴラタ儀礼

既に述べたように「ダラン・ダネグ」はマンダラを伴う宗教実践である。ここで留意すべき点は、ネパール仏教においてマンダラを伴う儀礼はすべて「ダラン・ダネグ」と呼べるが、すべての「ダラン・ダネグ」がヴラタ儀礼ではないということである。

興味深いことに、ヴラタ儀礼はネパールの仏教徒に最も浸透している儀礼であり、それに関するいわゆる「ヴラタ文献」が梵語および梵語・ネワール語混成写本の形でネパール国立古文書館、アーサー・アーカイブス（Āśā Saphu Kuthi）などネパール国内に多く保管されている。それ以外にも日本をはじめ世界の大学・研究機関にヴラタ関連の資料が所蔵されている。そこで、本論ではネパール仏教で今日も定期的に行われている主な六種のヴラタ儀礼の日時、対象となる尊格、功徳などを以下で簡潔に示す。なお、これらに関する写本類は数多く現存するが、紙面の関係で便宜上 Āśā Saphu Kuthi 蔵のみを紹介する。

①アシュタミ・ヴラタ（aṣṭami-vrata）

これはウポサダ・ヴラタ（upoṣadha-vrata）とも呼ばれ、崇拝の対象は不空羂索であり、同尊を中尊とする八幅輪マンダラを建立する。そして、開催日はその名の通り、白分の八日（新月から数えて八日目）にされる。これはネパールにおいて最も実践されているヴラタ儀礼であり、関連資料も多く現存し、研究も進んでいる[13]。無病息災から成仏まで幅広い功徳をもたらすとされている。

②ヴァスダーラー・ヴラタ（vasudhārā-vrata）

これはヴァスダーラー女尊を崇拝し、同尊を中尊とする六幅輪マンダラを建立するヴラタ儀礼であり、バードラ月（Bhādra，西暦 8 月中旬から 9 月中旬）とマーガ月（Māgha，西暦 1 月中旬から 2 月中旬）の黒分の三日

（満月から数えて三日目）は最適な日として定められている[14]。対象となる尊格はヴァスダーラー女尊であるために、福徳財宝の獲得がこの儀礼の功徳であると信仰されている。

③ターラー・ヴラタ（tārā-vrata）

これはターラー女尊を崇拝し、同尊を中尊とする八幅輪のマンダラを建立するヴラタ儀礼であり、白分の初日（śukla pratipadā、新月から数えて一日目）を最適な日として定めている[15]。ターラー女尊はネパールでは救済の女尊として親しまれており、同尊を対象とするこの儀礼を行うことで健康・長寿などの現世利益を得られるという。

④プールニマー・ヴラタ（pūrṇimā-vrata）

文殊もしくは法界語自在を対象とするこのヴラタ儀礼は同尊格を中尊とする八幅輪の法界語自在マンダラを建立する。満月の日が最適として定められ、その功徳は知恵から無常正等覚など幅広いものであるという[16]。

⑤ラクシャ・チャイトヤ・ヴラタ（lakṣacaitya-vrata）

これは鋳型に土を押し込んで十万の小さな仏塔を作る儀礼であり、他のヴラタ儀礼と合わせて行うこともある[17]。特にグンラーの一ヶ月間はこの儀礼を執り行う最適な時期である。これによって長寿が得られるとされている。

⑥チャトラダシー・ヴラタ（caturdaśī-vrata）

大黒天を対象とするこのヴラタ儀礼は、同尊格を中尊とするマンダラを建立し、その名前通り白分の十四日（新月から数えて十四日）が最適な日として定められている[18]。勝利や増益がこの儀礼による功徳という。これは他のヴラタ儀礼に比べて開催される数が少ない。

上記のヴラタ儀礼は基本的に実施する日が決まっているが、グンラーの一ヶ月間であれば、いずれのヴラタ儀礼も執り行うのに適する。そのために、ネパール仏教ではグンラー月に多くのヴラタ儀礼が行われる。このように、ヴラタ儀礼はネパールにおける生きた儀礼である。資料が豊富であり、ネパール仏教の構造を理解する上で重要であると考える。

3．ネパール仏教におけるヴラタ儀礼の構成

上述してきたように、ヴラタ儀礼は、無病息災など種々の利益を目的として、定まった日に、観音、多羅、ヴァスダーラーなどの尊格に対して誓いを立てて、マンダラを建立する。そこには、ジャータカやアヴァダーナ物語に基づいた説法を行うなど一連の修法が含まれる。これらの儀礼に関して現存する文献を比較すると儀礼構成には相違が認められる。そこでまず、複数のヴラタ文献[19]を参照しながら、共通する内容を以下の15項目をもって概観したい。

構成

1．主催者・道場の選定
2．地面浄化
3．沐浴
4．断食
5．十不善を捨すること
6．八戒の受持
7．グル・マンダラの供養
8．三宝マンダラ供養
9．三宝マンダラの意義の解説
10．根本マンダラの建立・供養
11．真言、陀羅尼、讃頌などの賛嘆
12．ヴラタ儀礼に纏わる物語
13．マンダラの破断
14．クマーリー女尊の供養
15．巡礼

1．**主催者・道場の選定**：これまで述べてきたようにヴラタ儀礼は個人ではなく集団で行う儀礼である。主催者には寺院、グティ（*nw.* guthi，実行

委員会)、もしくは個人などの誰でもなることができる。実施に適する日は決まっているものの、主催者がいなければ、開催されない年もある。現地の僧侶でブー・バハー寺院に属するDilli Raj氏やクワー・バハー寺院のDeepak氏によれば、近年ではほぼ毎年アシュタミ・ヴラタとヴァスダーラー・ヴラタが開催されているようである。儀礼開催のポスターを掲示して告知し、志願者を募集する。**図2**はヴラタ儀礼を知らせる2011年のポスターであり、それによれば、主催者はNepal Baudha Parisadaという団体で、募集人数は80人である。2011年9月11日と12日の二日に亘って開催するこの儀礼の初日は「ダラン・ダネグ」、そして二日目は「巡礼祭」である。場所は個人宅の広場になっている。

図2　儀礼開催を通知するポスター

2．**地面浄化**：ヴラタ儀礼にはマンダラ建立など複雑な儀礼も含まれるため、主催者は数ヶ月前から準備にかかる必要があるようである。儀礼の当日、道場の浄化を行う。特に、マンダラを描く地面には牛糞と赤土の泥を塗って浄化を行う。牛糞を用いることは古代インドの文化として知られるが、『金光明経』（4-5CE）にもその使用が確認でき、『大日経』「具縁品」（6-7CE）にも説かれており、仏教儀礼においても浄化に使われていることがわかる[20]。

3．**沐浴**：ヴラタ儀礼に参加する皆が早朝に沐浴し、清らかな服を身にまとう。

4．**断食**：この日は一日一食のみで、儀礼が終わるまでは飲み物だけが許される。

5．**十不善を捨すること**：儀礼の根本阿闍梨の指導で身・口・意による殺生

をはじめとする十不善を捨てる。

6．八戒の受持：八戒を守ることを誓う。なお、項目３から６までの行為は身・口・意の浄化に繋がるものである。

7．グル・マンダラの供養（gurumaṇḍalārcana）[21]：これはネパール仏教の基本的な儀礼でもあり、いかなる儀礼作法にも含まれる。この儀礼は自身を浄化し、三宝に帰依し、種々の供養を通し、有情利益を祈願するものであるという。これは本来、伝授[22]の受持者のみに許される宗教行為である。ただしヴラタ儀礼は阿闍梨の指導下で行うために資格の有無を問わず参加者の皆が各自のマンダラを供養することができる。

8．三宝マンダラ供養：ネパール仏教において三宝帰依を目的として「ナモー・ラトナ・トラヤーヤ」（namo ratnatrayāya, 三宝に帰命いたします）の句を唱え、さらに①仏マンダラ（buddha-maṇḍala）、②法マンダラ（dharma-maṇḍala）、③僧マンダラ（saṃgha-maṇḍala）の三種の八幅の「三宝マンダラ[23]」を描いたりもしくは観想したりする。そのうち、仏マンダラはビルシャナを中尊とする②阿閦、③宝生、④阿弥陀、⑤不空成就の四仏と⑥マーマキー、⑦パーンダラー、⑧ターラー、⑨ローカナーの四女尊のグループである。なお、法マンダラの場合は、尊格の代わりに典籍を安置する。すなわち、これは、『般若経』を筆頭にその周囲に②『華厳経』、③『十地経』、④『三昧経』、⑤『入楞伽経』、⑥『法華経』、⑦『如来秘密経』、⑧『方広大荘厳経』、⑨『金光明経』を布置する九つ経典群である。そして、僧マンダラは①観音菩薩を中尊とする、②弥勒、③虚空蔵、④普賢、⑤金剛手、⑥文殊、⑦除蓋障、⑧地蔵、⑨虚空庫の八尊を布置する九菩薩のグループである。ヴラタ儀礼において、この三宝マンダラの供養は儀礼の核である。この場合に、三種の八輻のマンダラを地面に描き、描いたマンダラを阿闍梨の指示の下で供養をしていく[24]。

9．三宝マンダラの意義の解説：仏・法・僧の三種のマンダラを各々供養した後、その都度それぞれのマンダラの意義を阿闍梨が解説する。

10．根本マンダラの建立・供養：根本マンダラの建立およびその供養はヴラ

図 3　根本阿闍梨

図 4　ヴラタ儀礼に参加する志願者たち

図 5　ヴァスダーラー・マンダラ

タ儀礼の核となる。根本阿闍梨（**図 3**）が供養する根本マンダラは詳細に描かれるが、参加者（**図 4**）各自のマンダラは線描きに限られる。三宝マンダラと同様にマンダラを建立して行う種々の儀礼作法は基本的に灌頂を受けた金剛阿闍梨でヴァジュラーチャールヤ・カーストの特権である。ただし、ここでも阿闍梨の指導の下で資格を問わず、その儀礼を自らが行う。

例えば、ヴァスダーラー・ヴラタ儀礼の場合、根本のヴァスダーラー・マンダラ[25]（**図 5**）は財宝を象徴する黄色の供物で鮮やかに荘厳し、本尊としてのヴァスダーラー女尊の仏像も安置する。その一方、志願者（参加者）はマンダラの輪郭のみ地面に描き、それを供養する。例えば、アシュタミ・ヴラタの場合、八幅輪、ヴァスダーラー・ヴラタの場合は六幅輪が描かれる。また、最近は参加者皆のマンダラを地面に描かずに、対象となっているマンダラを印刷した紙（**図 6**）を地面に安置し、供養する。

11. 真言、陀羅尼、讃頌などの賛嘆：マンダラ供養の一貫として、真言（mantra）、陀羅尼（dhāraṇī）、讃頌（stotra）など唱えることもある。ヴァスダーラー・ヴラタの場合は『ヴァスダーラーの百八名讃[26]』を唱える。
12. ヴラタ儀礼にまつわる物語：根本マンダラの供養が終わると阿闍梨が志願者に対してアヴァダーナ、経典などを典拠とする物語を通じてヴラタ儀礼の意義やそれによって得られる功徳などについて解説する。

ヴァスダーラー・ヴラタの場合、『ヴァスダーラー陀羅尼』（7CE）を典拠とする『スチャントラ・アヴァダーナ』（*Sucandrāvadāna*）や『スーリ

図 6　マンダラが印刷された用紙

図 7　ヴァスダーラーの寺院を巡る儀礼の志願者たち

ローダヤ・アヴァダーナ』[27]（*Sūryodayāvadāna*）などが説かれ、それぞれの物語にヴァスダーラー・ヴラタを実践したことで貧困の生活を強いられた主人公が福徳財宝を得るに至ることを言及している[28]。同様に、アシュタミ・ヴラタでは、『グナカーランダヴューハ』の物語を抜粋し、これまでの過去の仏菩薩も不空羂索観音のヴラタを実践したことで、無上正等覚を得たと解説し、ヴラタの意義をわかりやすく説く[29]。

13. **マンダラの破断**：一連のヴラタ儀礼の作法を終えると、マンダラを壊し、供養後の供物などを川に流したり、大地に戻したりする。

14. **クマーリー女尊の供養**：ヴラタ儀礼の参加者を代表して主催者がクマーリー（kumārī）女尊を祀る寺院に赴き、供養を行う。これをもってヴラタ儀礼は終わる。なお、このクマーリー供養（kumārīpūjā）は儀礼の終結を示すネパール仏教特有のものである。

15. **巡礼**：ヴラタ儀礼が終わると儀礼の中尊を祀る寺院の巡礼を行う。例えば、筆者が調査した2011年にパタン市にて開催されたヴァスダーラー・ヴラタの場合、二日目の午後からその地域にある約40の寺院を 4 時間かけて巡礼した（**図 7**）。

以上のようにヴラタ儀礼は一日もしくは二日に亘って行われる長い儀礼である。二日間に亘って行う場合、上記の項目からいえば「1．主催者・道場の選定」から「10. 根本マンダラ建立・供養」までは初日に終える。そして、二日目には再び「10. 根本マンダラ建立・供養」から始まり「15.

巡礼」まで行われる。一方、一日のみの場合は、ヴラタ儀礼の意義の解説、物語の部分を省略し、巡礼も行わない。

4．ヴラタ儀礼の特徴

上述したヴラタ儀礼の主な特徴を以下で示そう。

①ヴラタ儀礼は、特定の尊格に誓いを立てて行う集団的な実践であり、老若男女を問わず誰でも参加ができる。

②これは主催者の呼びかけで決まった日に、一日もしくは二日に亘って行われるが、毎年必ず行われているわけではない。また、場所も寺院の境内、聖地など様々であるが、これも主催者に依るものである。

③インド仏教の思想・儀礼の側面を支え、なおかつ異なったジャンルで異なった時代に成立した陀羅尼、マンダラ作法、アヴァダーナ物語などがヴラタ儀礼の中では集約されている。このように、この儀礼に用いる異なったジャンルの文献群が「ヴラタ文献」であろう。

ヴァスダーラー・ヴラタの例で言えば、その儀礼に用いる十九尊のヴァスダーラー・マンダラ（上記の第10項目）、『ヴァスダーラー陀羅尼』・『ヴァスダーラーの百八名讃』（上記の第11項目）、『スチャントラ・アヴァダーナ』・『スーリローダヤ・アヴァダーナ』上記の第12項目）などは単独の文献である。そのうち、十九尊のヴァスダーラー・マンダラは12世紀頃に成立したシャガタ・ダルパナの『阿闍梨作法集』が典拠となっている。さらに、『ヴァスダーラー陀羅尼』関連の文献に玄奘や不空の訳も現存するため、遅くても７世紀頃にはインドで成立していたと考えられ、唐時代に中国でも流布していたことがわかる。さらに『ヴァスダーラー陀羅尼』の読誦で貧困が除かれ、福徳財宝が得られるという信仰がジャイナ教にまで浸透していたとみられる。なお、『ヴァスダーラーの百八名讃』は本来曜日ごとに唱えられる七種の陀羅尼 *Saptavāra-dhāraṇī* に含まれ、日曜日に用いる[30]。

④この儀礼は断食や心身の浄化を基本とするが、マンダラを伴って行うところが最大の特徴であると言える。ネパール仏教において、曼荼羅の建立など複雑な儀礼を執り行うことは灌頂を受ける特権のあるヴァジュラーチャールヤ家系の阿闍梨のみに許されておりで、シャーキャ姓の彼らは施主に留まる。その点ネパール仏教におけるヴラタは寛容な宗教儀礼であり、資格を有しない者でも阿闍梨の指導の下で自ら複雑なマンダラの供養を執り行うことを可能にしている。

まとめ

ヴラタはヴェーダ時代から実践され、ヒンドゥー教にも広く浸透している宗教実践である。それはさらにネパール仏教において独自の発展を遂げている。ヴラタは断食や心身の浄化を基本とするが、ネパール仏教では①「アプサン・ツォネグ」と②「ダラン・ダネグ」の二種に分けられる。前者は資格の有無を問わず、一日もしくは一ヶ月の断食を行うものであり、ネパールにおいて15世紀には一種のヴラタとして認知されていたようである。後者はマンダラを伴う複雑な儀礼であり、本論では「ヴラタ儀礼」とした。

このヴラタ儀礼の名の下で、既に述べたようにそれまでのヒンドゥー教などで実践されている在り方を展開する形で、インド仏教において異なったジャンルで異なった時代に成立した陀羅尼、マンダラ供養、アヴァダーナ物語などが纏められている。ネパール仏教において、マンダラ儀礼は本来灌頂を受けたヴァジュラーチャールヤ家系の有資格者のみに許される。その点ヴラタ儀礼は寛容な宗教儀礼であり、僧侶と施主の両者が同じ空間で同時にマンダラを伴う儀礼を行うことが許される。これは資格を超えて実践されるため、僧侶と施主の両者の距離を縮めているものでもある。その結果、互いを支え合う関係を構築することに至っているとも言える。インド仏教が滅んでも、ネパールで今日まで仏教が継続している背景には僧侶と施主が執り行うヴラタ儀礼の存在が大きいであろう。

以上のように、ネパール仏教におけるこのヴラタは断食や心身の浄化を基本とし、さらにマンダラ供養、物語の解説、巡礼など一連の儀軌を加えたもので、僧侶の指導の下で、志願者たちが集団で行う実践である。また、これはネワール文化の風習の下でネパール仏教において巧みに作られた儀軌の複合体でもある。ゆえにこれはネパール仏教の縮図でもあると言える。今後の課題として、ヴラタ文献を使用し、個々のヴラタ儀礼の内容を明確にしていきたい。

主な参考文献

Chandra, Lokesh.（ed.）1999. *Kāraṇḍa-vyūha-sūtram*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

Gellner, David. 1992. *Monk, Householder and Tantric Priest*. Cambridge.

Iltis, L. L. 1985. The *Swasthānī Vrata : Newar Women and Ritual in Nepal*（Ph. D. Thesis）. University of Wisconsin-Madison.

Kane, P. V. 1973. *History of Dharmaśāstra (Ancient and Mediaeval Religious and Civil Law)*. Gov't Oriental Series, Class B, No. 6. Vol. V, 2nd ed. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Lewis, Todd T. 1989. "Mahāyāna Vratas in Newar Buddhism." *JIABS* 12(1): 109–138.

————. 2000. *Popular Buddhist Texts from Nepal*. Albany: State University of New York Press.

Lienhard, Siegfried 1988. *Nepalese Manuscripts Franz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH.

Locke, John. 1987. "Uposadha Vrata of Amoghapasa Lokesvara in Nepal" *L' Ethnographie* 83: 159–189.

Macdonell, Arthur A. & Arthur B. Keith, 2007. *Vedic Index of Names and Subjects*. Delhi: Motilal Banarasidass.（reprint）

Malla, Kamal P.（ed.）2000. *A Dictionary of Classical Newari : Compiled from Manuscript Sources*. Kathmandu: Nepal Bhasa Dictionary Committee.

Matsunami, Seiren 1986. *A Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.

Mitra, Rajendralal. 1981. *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*. Delhi: The Asiatic Society of Bengal (First edition 1882).

Moriguchi, Mitsutoshi 1989. *A Catalogue of the Buddhist Tantric Manuscript in the National Archives of Nepal and Kesar Library*. Tokyo: Sankibou Busshorin.

McDaniel, June. 2003. *Making Virtuous Daughters and Wives : An Introduction to Women's Brata Rituals in Bengal Folk Religion*. Albany: State University of New York Press.

Pandit, Asha Kaji. 2010. *The Daśakarma Vidhi*. Kathmandu: Mandla Book Point.

Pearson, Anne Macken. 1996. *Because It Gives Me Peace : Ritual Fasts in the Religious Lives of Hindu Women*. Albany: State University of New York.

Raye, Anne. 2013. *Stories of Success : The Role of Narrative in Nepalese Buddhist Vrata Literature*. London: University of Oxford.

Shakya, Mahendra. 1994. *Vasundharā Devi Chagu Adhyayana*. Lalitpur: Lotus Research Centre.

Shakya, Raja (ed.) 2000. *A short Catalogue of Āśā Archives*. Kathmandu: Asha Saphu Kuthi.

Studholme, Alexander. 2002. *The Origin of Oṃ Maṇipadme Hūṃ A Study of Kāraṇḍavyūha Sūtra*. Albany: State University of New York.

Tatelman, Joel. 1996. *The Trials of Yaśodharā : A Critical Edition, Annotated Translation and Study of Bhadrakalpāvadāna II-V*. Trinity: University of Oxford.

Tuladhar-Douglas, Will. 2006. *Remaking Buddhism for Medieval Nepal*. New York: Routledge.

Vajrācārya, Buddharatna. (ed.) 2005. *Nityakarma (Nhikaṃ) Vidhi : Gurumaṇḍalārcana Sahita*. Lalitpur: Vajrācārya Pūjāvidhi Adhyayana Samiti.

————. 2008. *Aṣṭamī Vrata Vidhi Saphu*. Lalitpur: Vajrācārya Pūjāvidhi Adhyayana Samiti.

Vajrācārya, Herakaji. 2001. *Nepalko Baudhadharmama Vasundharadevi*. Lalitpur.

Vajrācārya, Jogmuni. (Trans.) 1997. *Āryaguṇakāraṇḍavyūhasūtra*. Lalitpur: Nagarjuna Baudha Adhyan Saṃsthan.

Vajrācārya, Vikāsaratna. (ed.) 2008. *Aṣṭmīvrata pūjāvidhi*. Kathamandu: Nepal Baudha Samskriti Samraksana Kendra.

William, Monier. 1899. *A Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: The Clarendon Press.

井田克征　2011「十一夜の祭りの物語――中世ヒンドゥー教におけるエーカーダシーヴラタの起源――」藤巻和宏編『聖地と聖人の東西』勉誠出版.

氏家昭夫　1974「ネパールの仏教儀礼紹介 'Gurumaṇḍalārcana-pūjā' について――」『密教文化』105：96-72。

阪本（後藤）純子　2005「王族と Agnihotra」『印度學佛教學研究』53(2)：58-64。

佐々木閑　1987「Uposatha と Patimokkhuddesa」『仏教史学研究』30(1)：1-22。

スダン・シャキャ　2008「『ナーマサンギーティ』と「法界語自在マンダラ」について」『密教学研究』40：60-76。

――――　2009「ネパールに生きる密教儀礼について――法界語自在マンダラ儀礼の調査報告――」『密教資料研究所紀要』10：29-48。

――――　2010「ネパールの仏教寺院―1――ゴールデン・テンプルから見るネパール仏教の特徴――」『善通寺教学振興会紀要』15：16-42。

――――　2011「ヴァスダーラー（Vasudhārā）女尊の関連文献について」『密教学研究』43：23-40。

――――　2015「ネパール仏教における三宝帰依と三宝マンダラ――梵語及び梵語・ネワール語混成資料を中心に――」『密教学』51：211-227。

――――　2016 "The Sanskrit-Newari Bilingual Buddhist Manuscript of Nepal: Its Role in the Buddhist Studies"『印度学仏教学研究』64(3)：1275-1282。

――――　2017「ネパール仏教における『金光明経』の信仰について」佐伯俊源編『金光明経の思想とアジア流伝』勉誠出版（原稿提出済、出版予定）。

立川武蔵　2015『マンダラ観想と密教思想』春秋社。

田中公明　2010『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社。
田中公明・吉崎一美　1998『ネパール仏教』春秋社。

註

⑴　ネパールでは現在①テーラヴァーダ仏教、②チベット系仏教、③ネパール仏教の三種の仏教が共存している。①テーラヴァーダ仏教は、ミャンマーやタイなどから近年に入ってきた仏教でその歴史は100年未満であり、カースト制度とは無関係な形態のため民衆から広く支持を受けている。さらに、タマン、シェルパ等ネパールの山岳地域に暮らす民族を中心に古くから伝わる仏教が②チベット系仏教である。一方で、③ネパール仏教はネワール族が担い手となっているためネワール仏教とも呼ばれている。

　現代のネパール仏教においては僧侶も施主も世襲制である。僧侶になれるのはヴァジュラーチャールヤ姓の者のみである。一方、シャーキャ、ダークワなどの姓を有する施主も代々受け継がれる。これはヒンドゥー教のそれと類似する。しかし、元来はネパールの仏教は世襲制を認めなかったようである。14世紀に登場したジャヤスティティ・マッラ王の社会・経済改革が転機となり、ネワール族の仏教社会にもヒンドゥー教のカースト制が導入され、現在の僧侶・施主の身分制度あるいは階級が定着したのである。詳しくはスダン［2010：16-21］、田中・吉崎［1998：22］を参照。

⑵　スダン［2016］を参照。

⑶　Kane［1974　V-I：1-461］、William［1899：1042］、Macdonell　&　Keith［2007：341-342］を参照。特に Kane［1974　V-I：1-32］にヴラタの語源・意味についての言及があり、さらに Kane［1974　V-I：251-461］では、いわゆるヒンドゥー教で実践されてきた種々のヴラタのリストがあり、それぞれを行う日時や対処となる神格と共にその典拠となる資料について説明されている。

⑷　阪本（後藤）［2005：61-62］を参照。

⑸　Kane［1974　V-I：1-32］、Lewis［1989：109-110］、井　田［2011：332］、Raye［2013：4-7］を参照。

⑹　井田［2011］を参照。さらに、同研究ではエーカーダシー（ekādaśī；新月

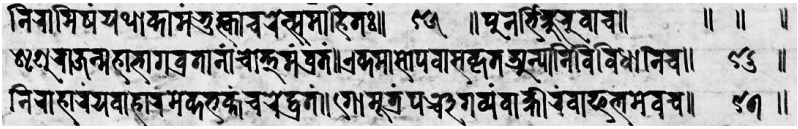
から数えて十一日目の日が白分の日）に行われるヴィシュヌ神を信奉する「エーカーダシーヴラタ」について詳細に言及している。また、ヒンドゥー教徒の女性がヴラタを実践することは特に多く、これを扱った研究として、Ilti［1985］、Pearson［1996］、Daniel［2003］などがあり、ヴラタは民族学の観点からも注目されているテーマであることがわかる。

(7) 『グナカーランダヴューハ』は4-5CE成立した散文の大乗仏典『カーランダヴューハ』（*Kāraṇḍavyūaha*；大正 No. 1050『大乗荘厳宝王経』、Tohoku No. 116, Otani No. 784）を典拠とし、大悲を司る観自在菩薩に関する15の物語が説かれている。Tuladhar-Douglas［2006：1-25］、Studholme［2002：9-17］を参照。

(8) 2008年から2014まで長年ゴールデン・テンプル寺院の保存会の会長を務めたギャーヌ・シャーキャ（Gyanu Raj Shakya）氏や同寺院の阿闍梨であるヴィクラム・ヴァジュラーチャールヤ（Vikram Vajrācārya）氏によれば、マイェ・アプサンを実践する人は少なくとも毎年一人はいるという。

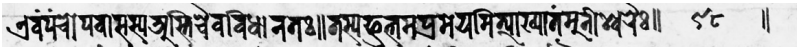
(9) アーサー・アーカイブス（Āśā Saphu Kuthi）蔵（DP No. 2117）の『グナカーランダヴューハ』の梵語・ネワール語混成写本の該当箇所を以下で示す。

DP No. 2117, 11a:



punar bhikṣur vāca// //
śṛnu rājan mahābhāga vratanāṃ cottamaṃ vrataṃ//
ekamāsopavāsa kṛta anyāni vidhāni ca//96//
nirāharaṃ yavāhāram ekabhaktāṃ ca cared vrataṃ//
gomutraṃ pañcagavyaṃ vā kṣīraṃ vā phalam eva ca//97//

DP No. 2117, 11b:



evaṃ paṃcopavāsasya asti caiva vidhānataḥ//
tasya phalam aprameyam ity ākhyātaṃ munīśvareḥ//98//

大幸運を有する王、他の優れたヴラタなどのことを聞いてください。

［試訳：①一ヶ月断食することや、②一日絶食すること、③一日大麦一粒のみ

を食べること、一日一食など種々のヴラタがある。さらに、④牛尿（gomutra）、生乳（kṣīra）など〔牛に由来する五種類のもの〕パンチャガヴィヤ（pañcagavya）を食べることや、⑤果物などだけを食べるヴラタもある。このように教戒に従い五種の upavāsa がある。その利益は無量であると釈尊が説いている。］

上記の部分は現行のサンスクリット語のみの写本（Āśā Saphu Kuthi 所蔵 DP No. 5109, 6a；DP No. 5111 : 6a Chandra 1999 : 8）に欠けている。ただし Āśā Saphu Kuthi 所蔵のサンスクリット語とネワール語訳を混成する写本（DP No. 2117, 11a–11b）には言及されている。また、同写本を Jogmuni 氏がネワール語訳作成時の底本としている。五種のヴラタの部分を Jogmuni［1997 : 8–9］にも確認できるが、同文を言及する『グナカーランダヴューハ』のサンスクリット語のみの写本の発見が今後の課題となる。なお、Chandra 1999の本題は *Kāraṇḍa-vyūha-sūtram* とあるが、内容は p. 2019 の後書きにも明記しているように *Guṇakāraṇḍavyūhasūtra-* の梵文写本のデーヴァナーガリー転写である。

⑽　ダラン・ダネグ dhalaṃ danegu は断食を伴う宗教行事を実践することを示す *nw.* dharama dāna もしくは *nw.* dharmma dana に由来する。また、*nw.* dharama や *nw.* dharmma は *skt.* dharma のことであり、ネワール語においては *r* と *l* が入れ替わることが多くみられる。Malla［2000 : 240］を参照。

⑾　ネパール暦は西暦879年10月20日よりカトマンドゥ盆地のネワール・コミュニティーを中心に始まっているため、この年号はネワール族のアイデンティティを示すものでもある。スダン［2016 : 239］を参照。

⑿　ヴラタ儀礼は阿闍梨の指導に基づいて行う一連の作法である一方、二日に亘って数百人が携わる賑やかな行事でもあるため、ネパールでは好んで「ヴラタ祭り」（vrata-parva）とも称されている。

⒀　アシュタミ・ヴラタについて、Locke［1987］や Tuladhar-Douglas［2006］の研究がある。B. Vajrācārya［2008］や V. Vajrācārya［2008］は僧侶たちが実際の儀礼に用いるために作られた梵語・ネワール語混成のマニュアルである。Āśā Saphu Kuthi 蔵 DP No. 2164などの写本類も複数現存する。

⒁　ヴァスダーラー女尊の関連文献、マンダラなどについてスダン［2011,

2016］を参照。Āśā Saphu Kuthi 蔵 DP No. 3270をはじめとする複数の写本類も残されている。

⑮ Lewis［2000：89–108］を参照。また、Āśā Saphu Kuthi 蔵 DP No. 3412など複数の写本類が現存する。

⑯ 法界語自在マンダラに関してスダン［2008］、スダン［2009］を参照。これに関しては複数の写本類が残されているが、Āśā Saphu Kuthi 蔵 DP No. 306はその例である。

⑰ 田中・吉崎［1998：214–218］を参照。また、一次資料として Āśā Saphu Kuthi 蔵 DP No. 3750をはじめとする写本類も現存する。

⑱ Lewis［2000：109–118］を参照。

⑲ Āśā Saphu Kuthi 蔵 DP No. 306, 2164, 2156, 3412, 3270, 3750などの写本や Locke［1987］、Lewis［1989］、Tuladhar-Douglas［2006］、B. Vajrācārya［2008］、V. Vajrācārya、［2008］、Shakya［1994］、スダン［2011, 2015］などを参照。

⑳ スダン［2017］を参照。

㉑ グル guru は師、阿闍梨を示すことであるが、guru-maṇḍala の guru は師という意味であり、ここでは物質的な師匠または阿闍梨ではなく、本尊としての金剛薩埵（vajrasattva）であるとネパール仏教の中で理解されている。グル・マンダラの供養に関する詳細は、氏家［1974］、田中・吉崎［1998：174–191］、スダン［2015：212–213］を参照。

㉒ ネパール仏教において灌頂を受けることがヴァジュラーチャールヤ（vajrācārya）のカーストの者のみに限られる。但し、「ニティヤ・カルマ」（ネワール語でニヒカン、*nw.* nhikaṃ）のような毎日早朝に各家庭で行われる本尊供養のような個々の尊格を供養するための伝授（dikṣā）ならば、男女、僧侶・信徒を問わず誰でも受けることが可能である。詳しくはスダン［2015：211–213］を参照。

㉓ 仏・法・僧の三宝マンダラは11–12世紀に活躍したとされているジャガダ・ダルナパナ（Jagaddarpaṇa）著『阿闍梨作法集』（*Ācāryakriyāsamuccaya*）を典拠とする。詳細はスダン［2015］を参照。

㉔ ヴラタ儀礼にみられる三宝マンダラについてはスダン［2015：213–215］を

参照。

(25) スダン［2011：28–30］を参照。

(26) スダン［2011：25–27］を参照。

(27) 『スーリローダヤ・アヴァダーナ』について Mitra［1981：269］および Shakya［1994：89–104］を参照。

(28) スダン［2011：25–26, 30–32］参照。

(29) 『グナカーランダヴューハ』Aśā Saphu Kuthi 蔵 DP No. 2117, 7a および Tatelman［1996：xxxiii］を参照。

vratānāṃ poṣadhaṃ śreṣṭhaṃ samākhyātaṃ munīśvaraiḥ/ etat puṇyānubhāvena saṃprāpto bodhim uttamām//atītā api saṃbuddhā etat puṇyānubhāvataḥ/ jitvā mārān samāsādya saṃbodhimabhavan jināḥ//

(30) ヴァスダーラー関連の文献についてはスダン［2011：25–32］を参照。

付記

本稿は、平成29年度科学研究費助成事業［基盤研究(c)］「課題番号16K02171」および「種智院大学同窓会助成金」による研究成果の一部である。

キーワード ヴラタ、断食、マンダラ、アヴァダーナ物語、ネパール仏教